

組織検討特別委員会

発足にあたって

委員長 谷口 修

昭和44年12月19日の評議会申し合せにより、本学の研究教育の制度および組織を検討し、その改善案を作成する任務を持つ、東京工業大学組織検討特別委員会が発足し、現在審議を重ねつつある。

本学の改革に関しては、昨年4月以来、改革調査特別委員会のおこなった本学の現状における問題点の分析をはじめとし、BC特別委員会、学部教育制度検討特別委員会、大学院制度検討特別委員会、研究体制検討特別委員会、教官自己規制に関する委員会などにおいて活発な論議が展開され、幾つかの改革案が発表されてきたのは、旧広報委員会発行、東京工業大学資料No.1、No.2を通じて、周知のところである。

これらの改革案のうち、学部教育制度、大学院制度、研究体制に関するものは、本学の中心的機能である教育と研究が自由で創造的雰囲気のもとで高い水準で実践できることを目標として検討されたものであるが、これらの改革案を調整し、相互に矛盾なく実施できるような組織について検討を加えるのが、本委員会の任務である。したがって、本委員会においては本学の改革の最終的な形ばかりでなく、現状からそこへ到達するための過渡的な措置についても、検討を加えることとなる。

この目的のために、本委員会の委員として、教育、研究、施設、大学院の各常置委員長 および、

これまでの改革案の審議に深く関与されてきた方々に学識経験者として参加を頂いている。

また特定の事項を審議するに当っては、必要に応じて専門委員の参加をおおぐ予定である。

大学をめぐる情勢がきわめて流動的であり、教育に関する国を挙げての論議がなされている現在、本委員会の仕事が学内改革案の調整、その実施案の作成のみに留らず、各方面から出されている改革案の調査整理に互ることは免れないが、理工系単科大学として伝統ある本学が、高いレベルの研究と教育が自由で活動的な雰囲気のもとで実践できるような独自の制度と組織を作り上げてゆくことが、最も重要なことであろう。本委員会はかなり長期に亘る審議をおこなうこととなるが、審議内容は区切がつくごとに発表する予定である。学内諸方面から活発な建設的御意見が頂けるよう切望する次第である。

本委員会の構成メンバーは下記の通りである。

委員長	教 授	谷口 修
副委員長	〃	田中郁三
委 員	〃	岡田利弘
	〃	栗野 満
	〃	川上正光
	〃	室田忠雄
	〃	清家 清
	〃	池田朔次
	〃	田中 実
	〃	斎藤進六

教 授	青木成文
幹 事	助教授 増田正美
	〃 市川惇信
庶務課長	岡 行輔
教務課長	今阪潤一
企画課長	石川信田
研究協力課長	金田清美

学科進学「予備調査」結果

昭和44年度（現1年次学生に対する）所属学科志望の予備調査の結果は、第1志望、第2志望の集計は下記の通りである。第1志望では、電子、数学、物理、社工に希望者が多く、第2志望では、機械、応物、社工、制御(E)などに多かった。

学 科	定 員	第1志望	第2志望
数 学	20	55	13
物 理	25	59	20
化 学	40	42	16
応 用 物 理 学	40	48	74
金 属 工 学	30	2	6
織 維 工 学	25	0	2
無機材料工学	25	1	7
化 学 工 学	40	8	7
合 成 化 学	40	6	15
高 分 子 工 学	40	13	25
応用電気化学	25	3	3
機 械 工 学	75	39	39
生産機械工学	40	2	9
機械物理工学	40	39	80
制御工学(M)	20	9	33
〃 (E)	20	33	62
経 営 工 学	40	23	49
電 気 工 学	45	31	41
電 子 工 学	40	82	39
電子物理工学	40	55	55
土 木 工 学	40	32	51
建 築 学	65	87	21
社 会 工 学	40	68	64
(計)	855	737	735

教育委員会委員長

栗野 満



このとき注意すべきことはまず選考は学科所属の資格をもつ学生の第1志望を尊重して行なわれると

学科所属の資格が得られていない学生（いわゆる1年次留年生、学内浪人）が例年数十人はいるが、その取扱い方法は、45年度入学者がすべて類に所属することになっているので、教育委員会としても早急に処理しなければならない重要事項の一つになっている。



就任にあたって

教務部長

長崎久弥

私はこの度教務部長を命ぜられ、石川前教務部長のあとを引継ぐことになりました。その責務の重大さを考えると身の引き締まる思いです。

私も人生の半ば近くを本学にお世話になっているものなので、また定年まであまり永くないので、お引き受けした以上は誠心誠意やってみるつもりでおります。勿論、気持だけで務まるものでないことは承知していますが、この点については、この道のベテランである

全く意外な事には、学長が任命する東京工業大学図書館長に、この2月1日から私がなりました。図書館の重要性は、よく承知してはおりましたが、館長になるとは思っておりませんでしたので、いささかとまどっていると思せましょう。

図書館を、私の学生時代にどのように利用していたか。現代の学生も恐らくそれと同じような Behavior をとるのではあるまいかと考えた私は、昔の事を思い出して見ました。私が学んだ東大工学部冶金学科には、冶金学科だけの図書室、閲覧室があり、大抵の用はこゝで済みました。勿論、本を読む場所ですが、いろいろなレポートを書いたり、又、静かにじっとしていたい時などに、たまにこゝを利用しました。つまり、図書館の閲覧室は、本を読むとか調べるとかの他に、自分独りでじっとしていたい場所にも私は使いました。これは他の人も同様ではなかったかと思います。唯今、上野や日比谷の図書館が、静かに受験勉強のできる場所として、高校生あたりに利用されているのは周知の事実です。私は、図書館の、このような効用を無視してはいけない気が致します。

静かに、独りでじっとしていただける所という事になれば、閲覧室の席が普段は80%ぐらいが使われていて、20%ぐらいは空席があるという事が絶対に必要でしょう。私の学生時代の東大図書館あたりは、どんなに混んでいても50%ぐらいで、いつ行っても席はありました。だから、静かに独りで、じっとしているためには、私にとって最適の場所であったわけです。たまに、その目的に利用した冶金学科の図書閲覧室は、たえず知

次長が女房役としておられることですし、また副部長として岡崎光雄教授、小林啓美教授、辻茂助教授の協力をうる事ができるようになりましたので、非常に心強くまた幸せに思っています。

教務部では、教務関係および学生厚生関係の業務を能率よく処理する責務があり、これを果すことがひいては本学をよりよくするもの

のと考えています。現状を見ますといろいろと問題があるのではないのでしょうか。これらのことを十分検討して解決への努力を尽すべきものだと考えます。

新任早々なので抱負などと大きなことは申すのもどうかと思いますので、心境の一端を申し述べて挨拶とします。全学教職員、学生諸君のご理解とご援助を期待します。

図書館長になって

桶谷繁雄



人と顔をあわせる機会があります。ところが東大図書館となれば、そのような事は殆んどなく、知らない人ばかりです。そういう点で、私はこの図書館を随分利用致しました。

さて、今日の学生も、図書館利用には、上にのべたと同様な傾向があると思われます。又、学生の「たまり」となる場所が少ないために、その代用として図書館が考えられます。そうしますと、本学の図書館は、今のような学生の急増に対して、狭すぎて、ニッチもサッチも行かないといえるでしょう。これをどうするかというのが、どうも新館長の私に課せられた重大な使命ということになりそうです。

勿論、図書館があらゆる意味で狭すぎるという事は既に早くからわかっており、歴代の館長がいろいろと考えて来たところです。種々の青写真もあります。従って、私のなすべき事は、具体的に、いかなる第1歩を踏み出すかという点にあらうか……と思われるます。

わずか定年まで1ヶ年で、何ができるか甚だ心もとないのですけれど、やれるだけの事はやって、後に続く人が少しでもやりよい様にするのが一番ではないでしょうか。その点で、皆様の御援助をお願い致します次第です。

アラブ連合共和国から 帰って

制御工学科 森田 矢次郎

ひょうたんから駒

4年前の大岡山、ある日の制御工学科の学科会議の席上で、主任の内藤先生から一通の書類を回覧するよう渡された。「ユネスコ技術援助専門家の募集について」というもので、開発途上にある国で技術的なアドバイスをしてやろうと思う者は来たれという趣旨。正直なところ、国際平和促進の一助としてという大義名分と、最後にアメリカから帰って7年目（サバティカル制度がアメリカにはある！）この辺で知らぬ世界を見たいという野性の呼び声と半分半分ぐらいの理由から、「応募してもいいですか」といってしまった。

私は国際連合教育科学文化機構（ユネスコ）が張っている技術専門家（エキスパート）徴募の網にかかったのである。1949年国連は技術援助計画（Technical Assistance Program）を樹立、世界各国相互、ことに開発途上にある国々に対する技術援助に積極的にとり組むことを決議し、更に1959年開発のための経済的裏づけとして特別基金（Special Fund）の制度を立てた。この特別基金は、国連の下部機構（Specialized Agency）であるユネスコ、ユニセフなどに委託され、世界の天然資源の調査、応用研究、職業訓練、高等教育などの分野におけるプロジェクト推進してゆくのである。いままでユネスコだけで1億2500万ドルあまりをこの特別基金のうちから使っている。ユネスコのプロジェクトの数は現在約80、そのうち50以上が、高等学校以上のレベルでの技術者養成、教師養成のためのプロジェクトである。特別基金はエキスパートの派遣、人件費、奨学金、および器材器具の購入にあてられるが、通常土地や建物には使わない。プロジェクトは、ユネスコが立案することもあるし、ある国からの技術援助の要請という形で出てくることがある。いずれにせよプロジェクトの採用が可決されると、ユネスコは、そのプロジェクトに必要なエキスパートの推薦方法を世界各国に依頼する。日本での窓口は文部省のユネスコ国内委員会である。

エキスパートの需要は不断にあるので、たまたま4年前には、どのプロジェクトということではなく、一般的にエキスパート候補を登録しておくということであった。エキスパートがプロジェクトにつくまでには

長い時間がかかる。ユネスコ本部、プロジェクトをやる国の政府、そしてエキスパート自身の3者の合意が必要だからである。エキスパートを含めて国連関係で働く人たちの数を出身国別で分けると日本は非常に少ない国のひとつである。多く人を出しているのは、北欧諸国、インド、中近東諸国というところ、またソ連や東欧諸国ではこのような人びとの派遣を政府の仕事としてあるていど強制的に行なっているという。エキスパートにはいい加減な人間を雇うわけにはいかない（私の場合には書類審査、外国語試験、面接があった）。しかし、仮にもエキスパートと呼ばれる人であれば年齢もかなり進んでおり、それぞれに自分の仕事を持っているはずである。それをほうり出して知らぬ他国の、一般的に言えば生活条件の悪いところで一肌ぬぐうというのは、各人の自発意志に任せておけば、余程の変りもので、恵まれた状態にあるものしか集まらぬということになる。

だが、国際協力場で各国の人びとはその人数においていちおう自分の国の国連に対する貢献度を代表していると考えられるので、もし私たち日本人が昨今言われているようにおのれの国を世界の大国をもって任じ、エコノミックアニマルの蔑称を恥じる心があるならば、実質的な意味での国際協力への足がかりとして、このようなユネスコの活動の意義について興味と関心を寄せるべきであろう。

応募してから数か月、日常の仕事に紛れて、時どき思い出したようにスペイン語の本をめくったりしていた。もし選択が許されれば、アメリカ時代からの願望である中南米の国に行きたかった。何となく懂がれてスペイン語をかじってから15年になるのだが未だその期を失したという奴である。従って、「貴殿をアラブ連合共和国すなわちエジプトに行かせるべく努力中」という通知を受けたときは驚いた。中近東という地方についての私の認識は素人も良いところだった。こりゃあとんだひょうたんから駒、しかもアラビヤ産のしゅん馬がとび出した、などと思ったが、もうあとへは引けない。

「彼は野郎ばのような人となり……」

アラブ連合にいるあいだ、しばしば私は旧約聖書のこの句を思い出した。タフで強情で卒直なアラブの人びとが大声で議論し合っているのを聞くおりなど、一望さえぎるものない荒野に立って天空に向けて力いっぱい、いなく声を競う野郎ばを、失礼だが、連想してしまう。彼らとつき合うコツを呑み込むには多少の月日が必要である。呑み込んだ時にはこっちが半分アラブ的になっている。でも一緒に仕事をやるにはそれ

* 創世記16章12節アラブ人の祖先イシマエルに対する予言

しかない。

エキスパートはあるプロジェクト派遣が決まると、パリにあるユネスコ本部に呼ばれて、2週間ほど、プロジェクトとその国の一般情勢に関するおさらいをする。本部の資料室には、世界各国の生活環境に関する情報や歴史、宗教、風俗の要約や、いままでの活動の成果の記録ともいうべきエキスパートたちのレポートがぎっしり詰まった部厚いファイルが並んでいる。しかし文字が伝える限界のゆえに、東京やパリで準備し、想像を働かせていても、いよいよ現地で、セム人種たちの持つ異質の伝統に触れるときの驚き、よろこび、尊敬そして失望の思いはわからない。エキスパートは半年に1度レポートを出さねばならぬ。私自身の書いた5篇のレポートも客観的、技術的という特性が味けなく光るのみで、われながらよそよそしいものであった。「彼らは野郎ばの如き人びとで……」などと書くわけにはいかないのである。氷雨降るパリをあとに夕闇せまる巨大なカイロ空港に降りたったのは1968年1月16日である。

勝利の町——マンスーラ

私のプロジェクトはカイロの北やく120キロ、ナイルの分流ダミエッタにのぞむマンスーラにある。マンスーラとはアラビア語で勝利を意味し、かつて十字軍遠征隊と一戦を交えてこれを破り、隊長のフランス王をとりこにしたという所で、今でも彼を入れておいた牢が残っていて、町の住民に多くのフランス人の血が入っているという。

この町にアラブ連合政府がポリテクニクインスティテュート（技術大学）を設立し、自国の必要とする実際に役立つ学士レベルの技術者を養成しようとはかっている。1963年以来ユネスコがこれを援助し、エキスパートのチームを1～2年の任期で交替で派遣し順次各専門分野を充実させてゆくのである。

私のうけもちちは応用熱工学、とくに空気調和、冷凍ということであった。最初、その年までの懸案だった教授要目を協力して作りあげた。エキスパートたちが各国からカリキュラムを持ち寄り取捨し大変ガッチリした教授要目ができた。これにもとづき、実験室、研究室の設計と建設、器具の購入、すえつけ、試験をやる。その間5年生（この大学は高校卒業後5年の教育をする）の卒業研究の指導や授業、それに行政事務、と、大岡山時代に較べて私の仕事は広く浅くならざるを得なかった。

目まぐるしい東京から行った私にとって、ゆったりした敷地にひろびろと建てられたこの大学はそれなりの良さがあった。すでに1500人ほどの学生が勉強して

いる。工学部と農学部が同居しているので、熱機関実験室の鼻先が温室と花畑で、咲き乱れるコスモスや教材用の水牛の群れが、やがてすえつけられるであろうジェット機関の排気ガスを避けてどこへ行くべきかなどという心配も、土地が余っているだけに日本ほど深刻ではない。

エジプトの気候の良さは抜群である。冬は暖く、夏は爽やかに暑い。昼日中には地中海から吹く微風があるので日蔭に入れば快適である。夕方には満天が黄金色に変わって夕陽がなつめ椰子の黒いシルエットを惜しみながらナイル河のむこうに沈む。来る日も来る日もそんな安定した日が続いて人びとは宇宙の永遠性を信じ、楽天的で幸福な人生観を持つという。

もちろん有難くない面だって沢山ある。蠅、蚊、ノミ、シラミ、ゴキブリ。人間にとって住み易ければ虫にとっても同じなのだろう。まだ自動車の代りに馬車を使い、時おり羊飼たちが、数十から数百頭の羊を町の間拔きどおりを通らせることもあるマンスーラでは細菌の繁殖のための栄養素に事欠かない。私たちの2人の幼児がチフスにやられて2週間ほど寝こんだあと、妻と私は決して彼らに外で食事をさせぬぞと心をきめたものである。

対外的にエジプトの抱える問題は深刻である。国民生活のいたるところに暗いかげを作る中東戦争解決の見とおしは、今のところ、ない。ニュースでカイロやその附近の爆撃の報をみるたびに私の心はいたむ。エキスパートとしての仕事をやりながら、私たちは何度となく、こんな遠まわりの、明日をも知れぬプロジェクトの意義があるのかと自問したものである。しかし、私たちは、国連をとおしての国際間の緊張の解決が、ほとんどただひとつの希望であり、その国連活動の平和的な一面として、ベストを尽してアラブ連合の人たちのために奉仕しようという点では一致していた。私たちの仲間には、イギリス人がいた、ロシア人がいた、ハンガリー、ポーランド、インド、ニュージーランド、ヨルダン、ユーゴの人びとがいた。皆、個人的には良い、有能な人たちである。私たち人類が集団として示すヒステリヤ・パラノイアからさめる日はいつ来るのであろうか。

こういうわけで私は故国で大学問題が爆発していた時期をアラブ連合で過ごした。今の岡山は私が2年前知っていた大岡山では、もはや、ない。けれども私は再度の外国住いで自分と故国との関係が自分の考えていた以上に深い、業（ごう）とも言いえるような抜きさしならぬものであることを発見した。変りつつある大岡山はそのまま私自身の問題なのである。

◆ 叙位叙勲

1月4日死亡した佐藤三平助手は、正七位に叙せられ、勲六等瑞宝章を授与された。

◆ 附属工業高校では、45年度の専攻科生徒募集をする。募集人員は約 100名（機械、電気、建築、工業化学）で、願書受付は4月1日から6日まで。筆記試験は4月7日、面接は8日、9日の両日、合格者発表は4月13日である。（詳細は附属工業高校事務部教務掛 Tel (453) 2251 内線26へ照会のこと）

昭和45年 3月

卒業・入試スケジュール

◎学部卒業

3月10日 成績報告締切
3月11日 卒業研究審査報告締切
3月20日 教授会
3月26日 卒業証書授与

◎学部入試

3月3～4日 学部入学試験
3月20日 教授会（午後5時頃
合格者発表）

◎大学院

2月26日 修士審査結果報告
3月12日 博士審査結果報告
3月16日 博士課程進学者内定
3月20日 大学院教官会議
3月26日 学位記授与

◎1年次学生後期試験

3月20～31日

2,3年次学生 4月まで授業

昭和45年度 授業日程

◎1年次

前学期

4月16日～7月16日 授業
7月17日～8月31日 夏休
9月1日～9月21日 授業
9月22日～10月3日 試験
（7月9日、16日は火曜日の
授業を実施。）

後学期

10月7日～12月24日 授業
12月25日～1月7日 冬休
1月8日～2月8日 授業
2月9日～2月20日 試験
2月22日～ 春休
（12月24日は火曜日の、2月3
日は土曜日の授業を実施。）

◎2、3、4年次

前学期

5月6日～8月3日 授業

8月4日～8月31日 夏休
9月1日～9月21日 授業
9月22日～10月3日 試験
（9月16日、17日は火曜日の授
業を実施。）

後学期

10月7日～12月24日 授業
12月25日～1月7日 冬休
1月8日～2月8日 授業
2月9日～2月20日 試験
2月22日～ 春休
（12月24日は火曜日の、2月3
日は土曜日の授業を実施。）

行事および臨時休業

入学式 4月9日
学部新入生オリエンテーション
4月10日～4月15日
全学祭 5月22日～5月26日
創立記念日 5月26日
文化祭 11月21日～11月23日
卒業式 3月26日

◎大学院

前学期

4月16日～7月16日 授業
7月17日～8月31日 夏休
9月1日～9月21日 授業
9月22日～10月3日 試験
（7月9日、16日は火曜日の授
業を実施。）

後学期

10月7日～12月24日 授業
12月25日～1月7日 冬休
1月8日～2月8日 授業
2月9日～2月20日 試験
2月22日～ 春休
（12月24日は火曜日の、2月3
日は土曜日の授業を実施。）

行事および臨時休業

入学式 4月14日
全学祭 5月22日～5月26日
創立記念日 5月26日
文化祭 11月21日～11月23日
学位記授与式 3月26日

類別入試の

願書受付を終了

昭和45年度の学部学生募集は、
本学がはじめて採用した類別によ
る選抜方式にしたがい、去る2月
1日より10日まで願書受付を行な
った。

応募総数 5,511名で、去年の、
6,666名にくらべ約千名の減少で
あった。

競争のはげしい分野は、電気工
学系の第5類、理学部の第1類、
建設社工系の第6類などとなった。

	定員	応募数	競争率
第1類	125*	1,313	10.50
第2類	70	244	3.48
第3類	165	516	3.12
第4類	205	1,184	5.77
第5類	145	1,207	8.32
第6類	145	1,047	7.22
(計)	855	5,511	6.44

※ 昭和45年度から情報科学科（40名）
が増設される見込。

旭硝子補助金へ申請4件

昭和45年度の旭硝子工業技術奨
励会研究補助金の研究課題として、
本学からは、高温ワイゼンベルグ
カメラの試作と固相反応、人工蛋
白膜の製造、熔融高分子二重結合
の核磁気共鳴分析、セラミック高
温材料の蒸発、など4件を推せん
した。この奨励金は化学工学関係
の研究を対象とし、交付決定は4
月下旬ごろの予定である。

東京工大クロニクル No. 15

昭和45年 3月 3日

東京工業大学広報室 発行

東京都目黒区大岡山 2-12-1

Tel. (726) 1111 内線2033